

高橋コレクションの収蔵

兵庫県立人と自然の博物館 沢田佳久

1992年、高橋寿郎さんの標本は兵庫県立人と自然の博物館に収蔵されることになりました。その後の登録や現在の収蔵状況を報告しておきたいと思います。

高橋コレクションの特徴

高橋コレクションは、ここであらためて説明するまでもなく、日本とくに兵庫県の昆虫相研究の根幹をなす重要なコレクションです。

稀種、普通種にかかわらず各地各時期に採集されたものが洩れなくプレパレーションされています。そして、ほとんどの標本は高橋さんご自身または各々の群の専門家によって同定され、必要に応じて本誌をはじめ各誌に報告されています。このような証拠標本を多く含んでいるのが最大の特徴といえるでしょう。

また、特に力をいれておられたコガネムシ類については、交換や購入によって世界各地の標本が集められています。

博物館での標本の収納と管理

館ではコレクションごとに分けて、全て分類順に配置する事を基本としています。高橋さんの標本は現在、多くは科～上科程度の単位で各々の群のところに収納してありますが、クワガタムシ科については既に他のコレクションの標本と混ざって配置しています。高橋さんの標本には、他のコレクション由来の標本と同様に、四角で囲んだ「高橋コレクション」という小さな白いコレクションラベルをつけてあります。

1999年末の現在、収蔵庫が移動式の筆筒に移行中のため、甲虫のコーナーが幾つかに分割されたいわば仮住いの状態です。高橋コレクションの主要な部分の一つであるコガネムシ科は、登録と撮影（下記）を完了した段階で、科以下の整理ができていません。筆筒が揃ったらコガネムシ科の整理再配列を行いたいと思います。

博物館では全ての収蔵資料をワークステーション上のデータベースに登録して管理しようとしています。高橋コレクションについては1993年から登録

作業をすすめ、ようやく1999年春にば全ての標本の入力を終わりました（一部、専門のコガネムシの標本を手許において研究を続けておられました）。

高橋さんのコレクションを館では「甲虫」（受け入れ番号：1992-0048）と「半翅目」（1992-0047）に区別して受け入れています。個々の標本に付けている登録番号は甲虫がB1-125750～B1-182579（56,830件）で、半翅目がB1-118500～B1-125749（7,250件）です。標本一件づつ採集データ、同定情報、管理情報、画像などが記録されます。

博物館での標本の登録情報

採集データについては、ラベルに記入された内容をそのまま記入することを基本としています。表記が単純な場合は、国内産のものであれば上位の都道府県名や市町村名、海外のものでは国名などを補って入力しています。ほとんどの産地は地図上で位置を確認しましたが、文字が読解できないものや地図上に見いだせないものもあります。

同定情報については、同定ラベルや時に標本の配置をもとに、分類体系上の位置を入力しました。多くのものは種まで同定されていますが、海外産のものや、未ソートのものでは属や種が空欄のものもあります。分類体系は基本的に九州大学の日本産昆虫目録に従いました。

和名も基本的にはラベルどおりで、空欄のままのものもあります。また館では管理用の「資料名」を必ず付けています。これは通常は和名と同じですが、種まで同定できていないものや和名がないものは「何々科」などとなっています。

館での登録作業は、当初は紙の書式に手書きで記入し、業者に入力してもらっていたのですが、1997年からは館内でパソコンに入力したものをコンパットする方法で行いました。

採集データや同定情報とともに、多くの標本は画像も登録しています。ただし小型の標本は拡大率が十分でなく「小さい」ことしか読み取れない画像もあります。

これらの登録内容は今のところ十分な見直しをしていないので、採集データを含め多少の誤入力があ

ると思います。今後気付いた時点で修正してゆかなければなりません。同定情報や資料名は、今後の再検討、再同定の結果によって追加修正していくこととなります。

標本再調査について

所蔵標本は一部を除き公開されており、研究目的での標本の閲覧、検鏡は常に可能ですが、事前にご連絡頂ければ幸いです。もちろん通常は貸出しもできません。

現在のところ収蔵品データベースは外部からアクセスできませんが、ご来館前にお問い合わせ頂ければ必要に応じて館員が検索し、該当標本の有無、個体数等をお答えできます。将来的には(多少の制限付で)館外からの直接の検索が可能になると思います。

高橋さんの遺された標本を基にさらに研究が進展しますよう、皆様には活発な標本調査をお願い申し上げます。

展示などでの公開

高橋コレクションの標本の一部はすでに1996年夏のクワガタ、1998年秋のハナムグリの企画展で展示させて頂きました。糞虫などは未展示ですので今後の機会に使わせて頂きたいと考えています。

おわりに

重要な標本を当博物館に委ねていただいた高橋さんにあらためて深く感謝し、ご冥福をお祈り申し上げます。

(SAWADA YOSHIHISA 三田市弥生が丘6丁目
兵庫県立人と自然の博物館 系統分類部)

兵庫県のニセキバラケンモンについて 山本 義丸

兵庫県産ウスベリケンモン亜科については先に高島(1998)に依って従来の記録が総括されているが、キバラケンモン *Trichosea champa* (Moore) が淡路島を含む県下全域にわたる各地から記録されたことがわかっている。その中には、筆者が過去に報告した氷上郡及び氷ノ山の記録も含まれている。

上記の総括の中にも述べられている通り、従来1種として取り扱われていたキバラケンモンであったが、1986年、キタキバラケンモン *T. ludifica* (Linnaeus) とニセキバラケンモン *T. ainu* (Wileman) の両者を分離して3種となっている。そのうち最も南部に分布するのはキバラケンモンであるので、筆者は関西に分布しているのは全般に同種であろうと考えていたのである。

ところで、この程筆者所蔵標本の点検を進めるうち、市島町及び氷ノ山で採集していた個体がいずれもニセキバラケンモンであることに気付いた。いささか遅きに失した感があるが、ここに改めて訂正報告し、先のキバラケンモンとしての記録を取り消すことにする。

Trichosea ainu (Wileman) ニセキバラケンモン

市島町(妙高山), 28.VIII.1954, 1♂

関宮町(氷ノ山), 16.VIII.1955, 1♀

従って、氷上郡地方においてはキバラケンモンは未確認ということになる。氷ノ山を含む但馬から西播にかけての山地帯には、各所でキバラケンモンが記録されているが、この地域にはニセキバラケンモンの存在を考えなければならない。一方南部地域においてはキバラケンモンが普通と思われるが、筆者が大阪府箕面公園で採集したものはキバラケンモンの中に少数のニセキバラケンモンが混じており、ここでは混生地ということになる。六甲山系でも同様の可能性がある。兵庫県下において両種がどのように分布しているのか、今後の検討課題ではないかと考える。

<引用文献>

高島 昭(1998) 兵庫県のウスベリケンモン亜科とケンモン亜科 きべりはむし26(2): 44-58.

(YAMAMOTO YOSHIMARU 池田市渋谷2-2-20)